

一九九八年九月二二日～二四日

天候 快晴



メンバー

加藤一雄	轟裕彦	大塚賢一
51才	34才	43才

Climb the length of the Central Alps

中央アルプス縦走

「檜尾岳」、あれから一年が経過した。そして今またたどり着く。思い起こせばあの時は猛吹雪で視界15mほどで右も左もままならぬほどの悪天候であった。・・・しかしなんと素晴らしい景色であろう、南を振り返れば、コスモから10時間もの時間をかけて歩いてきた楽しくもあり、またつらくもあった10kmほどの縦走路が遙かかなたまで見渡せる。100名山の一つである八エマツの緑に包まれた雄大な空木岳²⁸⁸⁴m、そしてその後ろ遠くに猛々しい南駒ヶ岳²⁸⁴¹mが・・・、そしてこれらに包まれた名も無き山々、また北側には明日に向かう天をも貫くほどにそそり立つその名の通りの宝剣岳²⁸³¹m、駒ヶ岳²⁹⁵⁸m、そして下山ルートでもある伊那前岳²⁸⁸³mが・・・、西側には三ノ沢岳²⁸⁴⁶m、その後側に雲にぼつかりと浮かんでいるこの4月に山スキーでたんのうさせてくれた御嶽山が・・・、東側にはいまだ未踏峰の八ヶ岳連峰、南アルプス連峰、そして富士山が、はつきりと見渡せて360度の大パノラマ展望である、しかし、ひとたび昨年のようにこれらの雄大な山々が雄叫びを上げて荒れ狂えば視界どころか、我々の命すら奪いかねない・・・、このたびの素晴らしい天候に恵まれたことを、「山の神」に感謝である！。

12日 快晴

AM3:30に加藤宅に行き、明石のサービスエリアで轟氏と合流し一路名神から中央道に向かって松川インターで下車し、JR 飯島駅に着くこと8:30。駅前のタクシー(セブン)に車を預け、越百岳26132 mの登山道の入り口1300 m付近(シオジ平自然園入り口)の営林署横沢合宿所まで乗って4000円を支払う。上を見渡せば越百岳2613mであろうか?天高くそびえ立っている・・・あんな所まで登るのか?、非常に高い!の一言である。



1360 m、9:30、17度、中小川避難小屋に到着。いきなりの登山道では無くて透明感あふれる小川のせせらぎと小鳥の音色で我々を迎えてくれているようで気分も今日の天気と同じく晴々とした気持ちでリフレッシュ出来る。早速ここで冷たい行動水500mlを汲んでスタートである。

1440 m、中川登山道分岐。今までは林道歩きであったが、やっと今から登山道に入って行く。周りは熊笹と杉林の山の中である。道標では越百まで300分(5時間)と書いてある、なんと目立つのは大きく「このコースは初心者むきではありません!」と書かれているのが特に印象的であった。

さすがにいきなり険しく道幅も狭いが、親切に道の両サイドの熊笹を刈ってくれているのがあるがたい、もしこれが刈って無かったら道は隠れていきなりのヤブコギであろう。

1550 m、10:15。中小川の支流であろうか、そこを渡ると今までは熊笹ばかりであったのに、不思議なことにこちら側は熊笹は生えていなくてシダ類が生えて色んなキノコが生えて湿気た地形で

ある、何がどういうふうにもこのように環境を変えるのか自然の中では不思議が一杯詰まっている。

1760 m、11:05。まだまだ森が深いのではあるが、急登急登で心拍数が非常に高鳴っているのがわかる、ザックの重み17kgが肩や腰にこたえるがここで、「相生の滝」に到着。「すごい!」の一言である、ものすごく迫力のある滝である。疲れも吹っ飛んでそれぞれにカメラやビデオを回している。ここから南上空を見渡せば南アルプス連峰が雲の中から浮遊城のごとくぼっかりと姿を現している。今まで曇っていたが、太陽も顔を出してきて一同気分もウキウキ状態となり、まよわずこの素晴らしい大自然の中で小休止とする。

しかし、このあたりを過ぎてから、非常に険しくなり片足スクワット状態で、クサリ場あり、はしご場あり、両手を使っての登りが続いて「はぁはぁ、ぜえぜえ」であるにも関わらず加藤氏は、昔の沢の登りや岩登りを思い出したのか非常に早いペースで登って行くので付いて行くのがやっとであった。特に稜線越えの1930 m付近の「カモシカ落とし」と異名をとるとんでもない90度近いハシゴ場は超熱カンものである。

2010 m、12:15、「飛竜の滝」の手前でラーメ



常水ではないと思う」と言ってポリタンクに水を汲もうとしなかったのだが、私が「水では白山でイヤな思いをしてまいったんや!」と言って納得してもらい50mほど登った所で再び引き返して汲みに行ったものである。これが大正解でやはりこの後の登りでは水場は無かったのである。

2510 m、14:45、やっと越百岳の道標分岐点に到着。ここまで来ると今まで林の

ンタイムの大休止。ここで我々より先の先行者である老夫婦のパーティーに出会う。先週の大山登山に同行した佐久間さんの73才と言ひ、この77才の夫婦の元気な老人と言っては失礼ではあるが、このルートに登って来たのかと思うとそのパワーのすごさには一にも二にも圧倒されるものである。

2100 m、13:10、15度。大変涼しい、まだまだこの高さでも天然ミネラルに不自由しないのは我々登山者のにとっては宝物に値するほどうれしい限りである。

2350 m、13:55、越百小屋あとの最後の水場。ここで小休止。しかし、この水場でリーダー加藤氏と意見が食い違い、「地図ではまだこれが最後の

中だったのが一変して周りは八エマツに変わり視界がグーンを開けて最高なのだが、残念なことに南アルプス連峰はガスって真っ白である。これから良い隠れテントサイトを探しての稜線歩きである。

2613 m、15:00、無風、16度、越百岳山頂。少々周りはガスリ気味だがやっとたどり着いたという実感で疲れもどこえやらで最高である。やはり山頂はいい気分である。

16:10。この時間なのに信じがたいほどに暖かい(明日の天気)のが気になる。

山頂よりあれこれとテントサイトを物色してみるが、なかなか良いところが無くて山頂手前の登山道の真横の八エマツ帯の少し開けた所に2つは確保出来る場所に張ることにするが、ここでもやはり、前の登山者が張っていたらしく、真横でキジを打っているのではないが、「常識が無いヤツやのー」と言いながら仕方なく二張りして、早速夕食のジフイーズランチに取りかかる前にここまで重たいめをして持って上がってきた缶ビールで一同「コスモにカンパイ!」、少々ぬるいが最高にうまい喉越しである、しかし風向きによっては「ブーン」と・・・かなんなー!、と言いつつも酒の肴はトドさんがおいしいものを持って来ている





ので、ビールからウイスキーに変わって会話がどんどん弾んでいく。

このころになると、ガスも晴れて視界がはっきりとしてきて、体も気分も最高である。南アルプス連峰がはっきりと見えて、明日の縦走路であるとなんでもなく岩のノコギリのような仙涯嶺、でっかくそびえる南駒ヶ岳がはっきりと見わたせる。

夕食も済ませて、薄暗くなってくると、一番星が輝きだし、「今日はミルクィーウェイ(天の川)が見えるぞー！」と言って期待していたら、ほんとうに雲一つない空が、ダイヤモンドをちりばめたように明るく、星だらけになって星の川ミルクィーウェイがはっきりと見えるのは感動ものである。二ヶ月前に早人と登った白山以来である。

20:30、テント内の加藤氏は今日登って来た行程やこの素晴らしい星空などを夢見ながら高いびきで寝入っている。私もそろそろアルコールが程良く回ってきたので就寝。

13日 快晴

5:00、起床。なんと外を見ればピーカン日よりである。まだ、ご来光には30分ほど時間があるが、南アルプス連峰のシルエットがはっきりと雲海の中から浮き上がって朝一番から素晴らしいご褒美である。南アルプス連峰の間ノ岳3189mの右側に日本一の富士3776mが大きくはっきりしたシル

エットが印象的であった。しかし、何故か高山病にかかったのか、非常に頭が割れそうに痛いし気分も優れないのにはいかんともしがたいものがある。こんなにも不愉快な気持ちは山へ来て初めてである。そんな気持ちも押しこらえてコスモ山頂から御来光を見るために100mほど登ることにする。

5:35、ノコギリ岳2607mと甲斐駒ヶ岳2967mの間から見事なまでの御来光である。一同にシャッターを切る、加藤氏は気分もハイになって早速ビデオを回して色々と解説に忙しい。

7:06、朝食も終えてテントもパッキングして出発準備完了。頭もまだすっきりとしないがこの素晴らしいパノラマに助けられて地図上では登降注意と書かれている仙涯嶺2734mに向かったの稜線歩きである。

歩き出してすぐに昨日出会った老夫婦と出会った。彼らは山頂より30分ほど下がった所の越百山小屋に泊まっていた。小休止をして色々話していると、なんとお婆さんは「58才から山に登り初めてもう70才を越えてしまったので体力が無くなってしんどいです。」と言っていたが、「体力が無くてこんなにも険しい所へは来られませんかよ!」。本当に山へ来ればとんでもない人に出会ってこちらも励まされる一方である。下界のチマチマした足の引っ張り合いのような小さい事なんかはすべて吹っ飛んでしまうのでこのスポーツは一生続けるだろう。また「日本100名山は登られましたか?」と聞くと「58才から6年間で登ったよ!」とすんなり言うのでまたまたびっくりである。北海道から屋久島までの100ヶの名山である。平均で一年で17つの山を走破していることになる、当然それだけに登るわけには行かないので100名山に数えられていない山も数えれば500山は軽く登っていることになるだろう。今日は、360



度の大パノラマであるが、「ここから見える全ての山は登ったよ!」と、「これにはまた我々3人とも驚きの顔である。」この間色々と話している間もお爺さんは「うん、うん」とうなずいて「おれは婆さんに付いて行くだけや」とも言わんばかりで本当にこちらから見ていてもなごやかな夫婦であった。

8:30、2720 m、18度。相変わらずの大パノラマで素晴らしい限りである。仙涯嶺のピークも無事に越えて小休止。

9:23、2805 m、南駒ヶ岳の手前のピークで小休止。ここまでくるのに大変な登り下りの連続であるし、おまけに私はまだ頭がすっきりとせず相当疲れてしまったが二人は大変元気で付いていくのがやっとである。ここから見える南駒ヶ岳2841 m、赤檜岳2798 m、空木岳2864 m、そしてその向こうに熊沢岳2778 mと今日のキャンプサイトである10 kmほど先の檜尾岳2728 mが小さく見える、「あんなとこまで今日は行動するんか?、とんでもなく長い距離やなあー・・・」

10:00、南駒ヶ岳山頂。空木方面からの登山者でよくにぎわっているの、早々に退散して赤檜岳2798 m方面の稜線に向かうことにするが、ここで加藤氏が少々足がもつれたのか、砂利で滑った

のか尻もちをつく。「もう年やから足がもつれようなあ」と、すかさず私は「77才の夫婦の前ではその言葉は言えんでー」と。

10:30、赤檜岳2798 m山頂。やはり2500 m以上の希薄の酸素のせいで平坦な稜線はいいのだが、少しの登りでもすぐに「はあはあ、ぜいぜい」と息が苦しくなってくる。ともてもじゃないがこの高さでの高地トレーニングは私にはまだまだ出来ない。

12:00、空木岳2864 m山頂。もう我々のパーティーには一滴の水も無く喉もカラカラである。ここには去年登って来たところでもあり懐かしいところである。当日は天気良くて駒ヶ根高原から池山尾根経由で登ったのであるが、このコースも長くて険しかったが緑が一杯で素晴らしかったのを記憶しているが、次の日にはなんと猛吹雪になったので忘れがたいものである。この内容は私のHP <<http://www2j.biglobe.ne.jp/otsuka/>> に掲載している。

12:55、2520 m、木曾殿山荘到着。大変急な下りで膝がガクガクしている。あまりに喉が乾いているので小屋に入ると「コーラ200円」の看板に思わず、トドさんと二人で注文をしてしまった、加藤氏は「なんでコーラやねん?山では水が100万ドルに値するんや!」と活を入れられたが情け無いか我慢が出来なかった自分が悔しい。加藤氏がラーメンの準備をしている間に二人で「木曾義仲の力水」を汲みに10分ほど下る。なんと冷たくてうまいことか!、その名の通り力水だけのことはある。やはりコーラの比じゃないワ!、と二人で顔を見合わず。

14:30、東川岳2671 m山頂。ここまでの登りは非常に急登で一步一步の歩幅が大きくて大変であった、しかし、去年はこの途中にテントを張っ



た所を懐かしく思った。この時は朝テントから出れば真っ白であった。

15:52、熊沢岳2778m山頂。相当バテてはいるがハエマツの緑と真っ赤に紅葉しているナナカマドの群生、そしていつまでも360度の大パノラマのおかげで気も休まり、疲れも回復してくるようである。檜尾避難小屋がはっきりと大きく見えだした。ここから地図上の時間で1時間10分と書かれているが・・・。

17:30、檜尾2728m山頂、15度。大変な長丁場で、リーダー加藤氏も相当に疲れている様子である、こんなにも疲れたリーダーを見たのは初めてである。まあ、我々のこの行程を同じく来ているパーティーは誰もいないので当然ではあるが・・・。しかし、ここまで来るのに疲れもピークに達して非常に長く感じる、この登りを上り切ったら檜尾岳と思いつつピークを踏むとなんとその向こうに見えるが檜尾岳で、これには一同「マイッタ！」である。別にテントはどこに張ってもいいのだが、もう水が底を突いているので水場のある檜尾まで行かねばならないのが悔しい限りである。

18:28、我々がテントを設営している間にリー

ダーに水場に汲みに行ってもらったのだが、相当下らなければならないので、バテてしまったらしく、途中で「おおーい、ケンちゃん！」と叫ぶ声が.....、トドさんと顔を見合らし「何かあったんとちゃうか？」と急いで駆けつけたところ、やはり相当下まで汲みに行っていたようでかなりマイっていた様子であった。

恵那山方面への日没である。明日のルートである濁沢大峰方面の西側が金色に照らし出される、なんとも素晴らしい光景が。今日一日のご褒美である。

19:00、今日は、昨日に比べてさすがに冷え込みがきつくと言ってもこれが山では普通なんだが・・・5度である。フリース上下を着込み寒さに備えるがもう周りは薄暗くなっているので夕食を早々に済ませてテント内で晩餐会となる。今日を振り返って二人に一言述べてもらった、加藤氏「あぁー、バテたなぁ！」、轟氏「前半良かったが、後半はバテました」、私は「その逆で前半は頭が痛くて不調だったが、後半はいつものピッチを取り戻した」。

20:00、加藤氏も相当疲れていて好きなウイスキーも進まないし横になるとすぐに寝息を立てているので、早々にシュラフに潜り込んだ。しかし、今日の星空も一段と天の川がすぐそこまで迫っていて大迫力のものである。山に来てこんなにも2日とも上天気恵まれるのはごくまれである。

14日 快晴

5:00、起床。昨日と同じく、雲一つ無い上天気である。ドーム型の檜尾の小屋の後ろに横一文字のシルエットで広がる八ヶ岳連峰、南アルプス連峰・・・北から鋸岳2607m、甲斐駒ヶ岳2967m、



7:43、檜尾岳からいきなり高度200mほど下って、また200mほど登ると言うコースでいきなり的大汗である。濁沢大峰の急登に向かって危険箇所を何度もクリアして行くが、去年は猛吹雪でそれどころでは無かったのを所々で思い出す。

9:30、2875 m、18度、島田娘のピークである。しかしどこからこんな名前が付いたのか不思議である。やはり最初に登った人が島田の娘だったのだろう。

仙水峠 2340 m、地藏岳 2764 m、仙丈岳 3033 m、北岳 3192 m、間ノ岳 3189 m、富士山 3776 m、農鳥岳 3026 m、そしてそれらの空は金色に輝き、今か今かと御来光が顔を出さぬばかりである。

5:35、檜尾山頂での御来光を拝む。見る見る間に東側の斜面に日が当たりだし中央アルプス連峰の夜明けである。太陽の光に目覚めたかのように眼下に広がる恵那の町を埋め尽くした雲海が波のように漂う光景はなんとも言いがたいものである。

5:50、今朝の気温は3度である。加藤氏は昨日疲れ果ててものすごく夜は熟睡したらしくて、朝から「お~い!!」と雄叫びを上げての元気そのものである。考えられない事にいつもなら1~2度必ずトイレに起きるのにこの度は、一度も夜中にトイレに起きなかったと言うから驚きであった。本人も「自分でも考えられない」と言っていたほどである。私も昨日よりは頭の痛みも無く快調であるが、轟氏は気分がすぐれないらしいと言っていたが、歩き始めるとウソのように軽快なピッチで進んで行く。

7:15、快晴、17度、檜尾山頂で2728 mの高度に合わせていざ、宝剣岳2931 m、木曾駒ヶ岳2958 mに向けて出発。今日も長丁場になるだろう。

ここまで来ると、さすがに有名な千畳敷カールまで安全地帯のように両側にロープは張っていて観光所だなあ、と感じるルートである。それもそのはず、ロープウェイで日本一高い駅、2450 m付近まで容易に来れるのだから普段ならワイワイとにぎわっているところなのである。

10:10、極楽平を過ぎて、宝剣岳、三ノ沢岳の分岐地点に到着。加藤氏はこの三ノ沢岳が非常に気に入っているらしく、今度時間があれば登りたいものである。「山スキーは抜群に良いところや!」と言っていたが…。しかし、ここから見る宝剣岳はまるでゴツゴツの北アルプスを思い出すかのように岩、岩、岩の固まりでできたこれが「山かいなあ?」と言っても過言ではないほどにとげとげしく荒々しいのである。剣岳の小型のようなカニのタテバイ、ヨコバイと同じようなもの、そして岩のトンネルくぐり、それも膝を付いて四つん這いにならなければザックがつかえてしまうのでで気合いを入れて登らねば滑落しかねない。

10:44、2931 m、宝剣岳山頂。木曾駒ヶ岳の北方面にかすかに雲の切れ間に北アルプス方面が見える。また、南方面は昨日からの縦走コースが、檜尾、空木、南駒ととんでもない向こうに見える、



「あんなところから来たんかいなあ」と一同に口を合わせる。

11:25、宝剣山荘で水を補給してザックをデポし、空身で中央アルプスの中で最高峰の日本100名山の一つの木曾駒ヶ岳2958mに登ることにする。

11:42、山頂着、14度。天気が今一でガスってはいるが、ホントに静かな山頂である。この山頂で一人のオヤジに出会ったがそのオヤジは南アルプスに登ってきたが、山小屋は一杯でマイッタからこの中央アルプスに来た、と言っていたが、今年はロープウェイが止まっているので、下からの歩きになるので・・・「ホンマかいな？」と疑問を抱いたが、しかし山では一般常識では考えられない人が多くいるのでそうだと思うしだいである。

この山頂からの下山ルートは加藤氏が過去にお世話になった頂上木曾山荘の小屋のオヤジに合いたいと言い、私がビデオを構え彼らの再対した懐かしむ思い出の一コマを写した。ここへは4月から5月にかけての山スキーで十数回と訪れているのだそうで、今度は我々もお世話になるところであろう。

復路のルートは中岳2925mを登って宝剣山荘に降りるコースをとったのだが、加藤氏は腹が減ってしまい、ガス欠状態である。山荘のオヤジにも

らったポカリスウェットを喉に流し込んでなんとか持ちこたえたが・・・、「だいたい、山では11時が昼飯なんや！」と私にどなるしまつである。私は、日頃から暴飲暴食はやらないほうなので少しの食料でも体が順応するので大丈夫なのだが・・・。

12:45、2875m。伊那前岳に登る途中にラーメンタイムの絶好の場所を見つける。宝剣岳、千畳敷カールが少々ガスっているが見事に見渡せる良いところである。このカールを山スキーで滑るとなると相当の気合いがいる・・・正直言って非常に恐怖である。なにせ、雪の付いていないこの時期は絶壁なのだから・・・、それを加藤氏は何度も滑っているものだから「大丈夫、行ける行ける」と、軽い口調である。

13:40、伊那前岳2883m付近の地元では有名な「勤銘石？」当たりでのトラバースは、まるで立山連峰の真砂沢付近とよく似通っている光景である、眼下に見下ろす千畳敷ターミナルを室堂ターミナルに置き換えればそのままである。

14:30、2650m、下山ルート、6合目付近。周りを見渡せば一面のハエマツ帯は山頂付近より強風にさらされないのか、また酸素が十分に潤っているのか、足下に這え渡っていたものが、胸あたりまで生き活きと伸びてきている。またナナカマド、ダケカンバの紅葉も真っ赤に染まって見事である。

2570m付近がハエマツのティンバーラインになるのであろう、ハエマツ帯からアオモリトドマツ帯に移り変わり森といった感じで木漏れ日の隙間からフィトンチッドを体中に受けているような気がする。

15:23、2250m、小休止。うどんや峠との分かれ道に到着。遙かかなたにポツンと檜尾小屋が見



える。今から清水平・蛇腹方面へ下って行く。

15:52、2075 m、清水平に到着。まだまだ下山は続きます。

16:23、1775 m、蛇腹沢登山口、林道と登山道の分岐についに降りてきました。しかしここまでの行程は非常に長かった。この道中で1パーティとだけに出会った。

ここから、バス停までの距離は2.5 kmだ。つらい林道歩きである。

17:05、1510 m、やっとバス停に到着。しかし、な、な、何とバスはロープウェイの工事のために運休である。だれもこう言う時に限って携帯も持っていないくて・・・、「まあ、なんとかなるわ！」の精神でまたまた、今度はアスファルトの路をテクテクとただただ無口になってしまっ歩き始める。が、その時30分も歩かない内にロープウェイの工事の車が来た、思わず手を上げて止まってもらい、なんとか乗せてもらいヒッチハイクに成功！。

18:00、JRの駒ヶ根の駅である。ここまで車に乗って約1時間もかかるのだから、もしこれが歩きとなると、20時頃に駒ヶ根高原にたどり着き

その辺の空き地でテント、となっていたら。この後半はトドさんはもうバテバテになり「車に拾ってもらった所ぐらいが限界であった」と言っていた。

飯島駅までの200円切符を買い3日ぶりに下界の騒音に・・・ああ、また今からルール、ルールに縛られた生活になじんで行くのかと思うと・・・。

町うちでテントも張れないので仕方なく飯島駅で車に乗り換えて一路、姫路へ向かうことに・・・、00:30を回っていた。次の日は天気も良くなかったの正解でもあった。

中央アルプス縦走にカンパイ！！

後記

- ・入山している3日間ともに大変良い好天気恵まれたことを「山の神」に感謝である。
- ・いつもなら、ロープウェイは運行しているので大変な登山者であるが、この度は運休のために非常に少なく大自然にとけ込んだ。
- ・夏の縦走歩きで最も重要なことは「どこで水を確保する」それによって大幅に計画がくるってくる。
- ・いつもながら我々の行程は一般の人の1.5倍から2倍の距離を歩いているので今回は3人とも少々バテてしまった。
- ・縦走するには、車など交通機関を計算に入れて計画を立てねばならない。
- ・この度に経費は3人で食事、泊まり？、交通費全て込みで一人15000円に終わった・・・格安！
- ・この夏には天候不順で計画を中止したので、今回の縦走で夏も終わったと実感。この次は雪の氷ノ山からスタートが始まる。